

旺文社文庫

旅 愁 (上)

横光利一著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤尾好夫

【編集顧問】
(五十音順)

亀井勝一郎
塩田良平

茅 誠 司
中 島 健 蔵

木 村 毅
森 戸 辰 男

昭和46年5月10日

初版印刷

定価360円

昭和46年6月10日

初版発行

著 者 吉 田 と し

編 集 株式会社 サン・パブリシティ

東京都千代田区神田神保町1-29
電話 (294) 2781

発行者 陶 山 巖

印刷所 大文堂印刷株式会社 錦印刷株式会社

発行所 東京都千代田区
一ツ橋2-5-10
郵便番号 101

株式会社 集英社

電話 東京(265)代表6111
振替 東京 15653番

旺文社文庫

旅 愁 (上)

横光利一 著

目次

旅愁（上）

解説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

横光さんのこと

『旅愁』はなぜ読まれるか

代表作品解題

参考文献

年譜

海老池俊治えびいけしゅんじ

五〇九

五

古谷 綱武

五二三

亀井勝一郎

（下巻）

（下巻）

（下巻）

（下巻）

挿絵

朝倉

撰

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

旅
愁
(上)

家を取り壊した庭の中に、白い花をつけた杏あんずの樹がただ一本立っている。復活祭ふっかつさいの近づいた春寒い風が河岸から吹くたびに枝々が慄おそえつつ弁を落としていく。パッシイからセーヌ河を登って来た蒸気船が、芽を吹き立てたプラターヌの幹の間から物憂ものうげな汽罐きかんの音を響かせて来る。城砦じょうさいのような厚い石の欄壁らんぺきに肘ひじをついて、さきから、河の水面を見降ろしていた久慈くじは石の冷たさに手首に鳥肌が立って来た。

下の水際の敷石の間から草が萌え出し、流れに揺れている細い杭くいの周囲にはコルクの栓せんが密集して浮いている。

「どうも、お待たせして失礼。」

日本にいる叔父から手紙の命令で、ユダヤ人の貿易商を訪問して戻って来た矢代やしろは、久慈の姿を見て近よって来ると言った。二人は河岸に添ってエッフェル塔のほうへ歩いていった。

「日本の陶器会社がテエラン(1)の陶器会社から模造品を造ってくれと頼まれたので、造ってみたところが、本物よりよくできたのでテエランの陶器会社が潰つぶれてしまったそうだ。それで造った日本もそれは気の毒なことをしたというので、今になってあわて出したというんだが、しかし、やるんだねなかなか。一番ヨーロッパを引っ搔かき回しているのは、陶器会社かもしれないぜ。」

久慈は矢代の言うことなど聞いていなかった。彼は明日あすロンドンから来る千鶴子ちずこの処置しよちについて考えているのである。二人は橋の上まで来るとどちらからともなくまた立ち停まった。

目も痛くなる夕日を照り返した水面には船のような家が鎖くさりで繋つながれたまま浮いている。錆びた鉄

(1) カスピ海南方にあるイラン王国の首府。テヘラン。

材の積み上がっている河岸は大博覧会の準備工事のために掘り返されているが、どことなく働く人も悠長で、休んではばかりいるようなのだかな風情がいつそう春のおもかげを漂わせていた。

エッフェル塔の裾が裳のようにひろがり張っている下まで来ると、対岸のトロカデロの公園内に打ち込む鉄筋の音が、間延びのした調子を伝えて来る。渦を巻かした水が、橋の足に彫刻された今にも脱け落ちそうな裸女の美しい腰の下を流れて行く。

「明日千鶴子さんがロンドンから来るんだよ。君、知ってるのか。」

矢代は久慈にそのように言われると瞬間心に灯の点くのを感じた。

「ふむ、それは知らなかったな。なんで来るんだろ。」

「飛行機だ。来たら宿をどこにしたもんだらう。君によい考えはないかね。」

「さア。」

こう矢代は言ったものの、しかし、千鶴子がどうして久慈にばかり手紙を寄こしたのか怪しめば怪しまれた。

エッフェル塔が次第に後になって行くにしたがって河岸に連なるマロニエの幹も太さを増した。

およそ二抱えもあろうか。磨かぬ石炭のように黒々と堅そうな幹は盛り茂った若葉を垂れ、その葉叢の一群ごとに、やがて花になろうとする穂のうす白い蕾も頭をもたげようとしていた。

晚餐にはまだ間があった。矢代と久慈はセーヌ河に添ってナポレオンの墓場のあるアンバリイドの傍まで来た。燻んだ黒い建物や彫像の襞の雨と風に打たれる凸線の部分は、雪を冠ったように白く浮き上がって見えている。

その前にかかった橋は世界第一と称せられるものであるが、見たところ白い象牙の宝冠^{ほうかん}のようである。欄柱^{らんちゅう}に群がり立った鈴のような白球灯と豊麗^{ほうれい}な女神^{めがみ}の立像は、対岸の緑色濃^{こま}やかなシャンゼリゼの森の上に浮き上がり、樹間を流れる自動車も橋の女神の使者かと思えるほど、この橋は壮麗を極めていた。

矢代^{やしろ}は間もなく見る千鶴子^{ちずこ}の様子を考えてみた。彼の頭に浮かんだものは、日本から来るまでの船中の千鶴子の姿であったが、定めし彼女も別れてからはさまざまな苦労を自分同様に続けたことであろうと思われた。

「千鶴子さん、長くパリにいるのかね。」

と矢代は久慈に訊^{たず}ねてみた。

「長くはいないだろう。フローレンスへ行きたいんだそうだが、君によろしくって終わりに書いてあったよ。」

「終わりにか。」

と矢代は言って笑った。矢代は久慈とも同船で来たのであった。久慈は社会学の勉強という名目のかたわら美術の研究が主であり、矢代は歴史の実習かたがた近代文化の様相の視察に来たのだが、船の中では久慈だけ千鶴子と親しくなった。矢代は今も彼らとともにマルセイユまで来た日の港々の風景を思い浮かべた。

「もう一度僕はピナン⁽²⁾へ行きたいね。あそこは幻灯を見ているような気がするが、君はあのあた

(1) アレクサンドル三世橋。

(2) マレー半島の西側にある小島の中心地、ジョージタウン(ペナン)港のこと。

りから千鶴子さんの後ばかり追っかけ回していたじゃないか。あれも幻灯だったのかい？」
と矢代は言ってからかった。

「いや、あのときは夢を見ているようなものさ。何をしたのかもう忘れたよ。マルセイユへ上がった途端に目が醒めたみたいで、どうして自分があんなに千鶴子さんの後ばかり追い回したのかわからないんだ。いまだにあのときのことを思うと不思議な気がするね。」

「とにかく、あのマラツカ海峡というのは地上の魔宮だよ。あそこの味だけは阿片みたいで、思い出しても頭がぼうつとして来るね。あんな所に文化なんかあっちゃたまらないぜ。あいつが一番われわれには恐ろしい。」

アンバライドからケエドルセイにかかって来ると、河岸の欄壁に添って古本屋がつづいてきた。一間ほどのうす緑の箱が蓋を屋根のように開いている中に、ぎっしり本や絵を詰めた露店であるが、上からは樹の芽が垂れ下がり魚釣る人の姿もまた下のセーヌ河の水際に蹲んでいる。矢代は前方の島の中から霞んできたノートルダム（2）の尖塔を望みながら言った。

「僕はカイロの回回教のお寺も忘れられないね。あれはこのヨーロッパに自然科学を吹き込んだサラセン文化の頂上のものだが、ナポレオンがあのお寺を見て、癪に触って、大砲をぶっ放したのもよくわかるね。ナポレオンが日本へ来ていたら、第一番に本願寺へ大砲をぶち込んでいたぜ。」

そう言えば矢代はエジプトのカイロのことを思い出す。あのパラミッドのまっ暗な穴の中を優し

（1）人を迷わす、妖しい魅力を持った場所。

（2）回教のこと。マホメット教、イスラム教ともいう。回教民族を

通じて中国に伝わったことから、回回教の名がある。

（3）カイロの回教寺院同様、日本に精神文明（仏教文明）を吹

きこんだ拠点の一つが本願寺であることからこうだったのであろう。

く千鶴子ちずこを助けて登った久慈くじの姿を思い出す。

エジプトまでは矢代やしろと久慈はまだ親しい仲だとは言えなかった。それと言うのは、同船の客が港の上陸の際にもサロンでの交遊にも、二派に別れてそれぞれ行動を共にしていたからであった。これらの二組の中には若い婦人も混ざっていた。久慈のほうにはロンドンの兄の所へ行くという千鶴子がいた。今一方の組の中には、ウィーンの良人おととの傍へ行くという、早坂真紀子はやさか まきこが中心になっていた。矢代は上海しやんはいに半か月ばかり滞在してから、スマトラその他の南洋の港々を一か月ほど回り、シンガポールから初めて久慈たちの船に乗船したため、これらの二組のどちらでもなく中立派の態度をとって自由にしていたが、ひとたび船がスエズに入港してカイロ行の団体を募集したときから、この二派の関係は乱れてきた。

船がスエズからポートサイドまで出る一昼夜の間に、カイロ行の団体は陸路砂漠を横切りカイロへ出て、ピラミッドを見物してからポートサイドに回っている船まで、汽車で追っつかねばならぬのである。したがってこの忙しい旅には二派の反目など誰も考えていられる閑ひまはなかった。いよいよカイロ行の一行は、千鶴子の組も真紀子の組も呉越同舟こえつどうしゅうで三台の自動車に分乗した。

そのとき矢代は最後に遅れて自動車に乗ろうとするとどの自動車にも席がなかった。矢代はうろろしながら席を覗のぞいているうちに一台の自動車から急に久慈が飛び降り、「こちらへいらっしゃ

(1) (呉王夫差ふさと越王勾踐こうせんが長い間争った故事から) 呉越に仲のわるい間柄、かたき同士の意味があり、その仲のわるい人同士が一つ所にいあわせること。

い。ここが空^あいていますから。」と矢代^{やしろ}にすすめた。

久慈^{くじ}は矢代を自分の席へ入れると自分が運転手台に回ろうとした。

「いやいや、それはいけませんよ。」

こう矢代は言ったがそのときはもう久慈は運転手の横に乗っていた。矢代がそのまま久慈の席へ納まると同時に自動車は^{すべ}り出した。車内では矢代の横に真紀子がいて、その横にある船会社の重役の沖^{おき}がいた。沖と矢代は船中から親しかったが、この四人が一緒になることはそれまでになかったことであった。矢代はこのときから久慈や真紀子とも親しさが増してきたのである。

ポートサイドから船が地中海へ進んで行くと、船客たちはすでに上陸の準備をそろそろし始めたが、矢代はまだそれまで千鶴子とは言葉を言ったことは一度もなかった。

ある夜、イタリアへ船がかかり渦巻の多いシシリ島を越えた次の夜であった。一団の船客たちは突然左舷^{さげん}の欄干^{らんかん}へ駆け集まった。矢代も人々と一緒に甲板へ出て沖のほうを見ると、まっ暗な沖の波の上でストロンボリの噴火^{ふんか}が三角の島の頂上から、山の斜面へ溶岩の火の塊^{かたまり}りをずるずる^りり流しているところだった。

「まア、綺麗^{きれい}ですこと。」

と千鶴子が感嘆の声を放った。彼女としては傍にいるものが矢代だと気付^{きづ}かず^ずに言ったのだが、しかし、矢代も思わず、

「綺麗ですね。」

(1) ストロンボリは、イタリア南部にある火山島。そのストロンボリ島の噴火。



と口に出した。千鶴子は傍のものが矢代だと識ると、どういふものかつと身を退けて甲板からサロンの中へはいってしまった。慎しみ深い大きな目の底にどこか不似合いな大胆さも潜めていて、上唇の小さな黒子が片頬の髭とよく調和をとって動くのが心に残る表情だった。

次の日、地中海は荒れて船の動揺が激しくなった。矢代は夕日の落ちかかろうとするコルシカ島の断崖を眺めながら、甲板の上に立っていた。ときどき波が甲板に打ち上がった。あたりは一人も見えず冷たい風が波の飛沫とともに矢代の顔に吹きかかった。彼は欄干に肘をついたまま立ちつづけていると、後のドアが開いて近づいて来た靴音がびたりと停まった。矢代は煙草に火を点けたがマッチは幾本擦っても潮湿りの風に吹き消された。彼はマッチを取りにサロンへ戻ろうとして後を向くと、そこに食堂へはいる前らしい千鶴子が花模様のイブニングで一人立っていた。

「あのう、失礼ですが、パリのほうへいらっしゃるんでございますか。」

と千鶴子は寒さで幾分青ざめた顔をまっ直ぐに矢代に向けて訊ねた。

「そうです。」

「じゃ、もう明日お別れですわね。皆さん、そわそわしてらっしゃいましてよ。」

「そうですね。」

矢代は火の点かぬ煙草を口にくわえて笑った。

「あたしも皆さんと一緒に、マルセイユで降りたいんですけれど、やはり、このままロンドンまで行くことに決めましたの、あら、まア、あんなにお日さま大きくなりましたわ。」

と、突然千鶴子は嬉しそうに言つて夕日を受けた鑿のままコルシカ島の上を指差した。

「左のこのサルジニアでガリバルシー(1)が生まれたというんですが、ナポレオンと向き合っているところはおもしろいですね。」

「なんとなくそんな人の出そうな気がしますのね。」

船は首を上げたり下げたりしつつ夕日に向かつて苦しげに進んでいった。見ていてもその様子は氣息奄々(2)という感じで、思わずこちらの肩にも力がはいった。パツと甲板に打ち上がった波は背光を受けたコルシカの岩より高く裂け散って、人家も見えず、左方に長く連なった峨々とした灰藍色のサルジニアが見る間に夕日の色とともに変わっていった。

「ここは静かなところだと思つていましたけど、地中海が一番荒れますのね。」

と千鶴子は額に手を翳し、飛び散る泡にも滅げず言つた。

「そうですね。しかし、まア、幸いにこれほどで何よりでしたよ。ナポリへ船の寄らないのが残念ですが。――」

吹きつける風が千鶴子のドレスをぴたりと身体につけたままはたと裾を前方に靡かせる。

「コロンボまで来たとき、一番日本へ帰りたいと思いましたが、ここまで来ると、もうただわくわくするだけで、なんだかちつともわからなくなりましたわ。」

矢代は軽く頷いた。彼は今の自分を考えると、なんとなく、戦場に出て行く兵士の気持ちに似て

(1) 一八〇七―一八三、イタリアの政治家で、祖国統一の功労者。
(2) (氣息はいき、奄々におおうの意があることから)呼吸のたえだえなこと、また、いまにも息がたえようとする様子。